
土地分類基本調査

野 田
(千葉県内)

5 万分の 1

国 土 調 査

千 葉 県

1 9 7 9

序 文

本県の産業・文化を育んできた「風土」を解明することなくしては、本県の将来像を語ることは困難である。

本調査は、「風土」の重要な構成要素である地形・表層地質・土壌といった「土」に関する基礎的情報を全国的統一基準により調査・蒐集するものである。5万分の1地形図にその成果を刻んでいる本シリーズは、十年の歴史により積上げられた成果からもその重要性が広く認識されているところであり、土地利用・開発・保全・防災等各種地域計画担当者のみならず生きた教材として教育の現場に従事する方々にとっても欠くことのできない原典であるとの評価を載しているところである。

今回調査の「野田」図幅は、従来房総丘陵を中心に実施してきた本調査が調査対象を県北・下総台地に転じ、足跡をしるした第一歩である。

周知の如く本地域は、昭和30年代から大規模な住宅団地、工業団地の開発が活発になされ、現在もお土地の改変が著しく、時々刻々その本来の姿が失われている状況にあり、関係者から調査の実施・成果のすみやかな取りまとめが望まれていたところである。

本図幅は、千葉・茨城・埼玉三県にまたがる関係上、各県でそれぞれの県域内を調査することとし、調査実施・成果品調製に際し、三県の調査担当者が一堂に会する合同調整会議を数度に亘り催した。

困難を極めた調整ではあったが、この度三県の調整が整い、成果品の完成を見るに至ったことは、一重に国土庁土地局国土調査課の御指導によるたまものであり、また、本調査の趣旨を理解され、御協力を戴いた関係各位及び資料の提供をいただいた茨城・埼玉両県に対し深く感謝の意を表する次第である。

昭和55年3月

千葉県企画部長

吉 田 巖

目 次

序 文

まえがき

総 論

I 位置および行政区画	1
II 人 口	2
III 地域の特性	4
IV 主要産業の概要	10
V 開発の現況	14

各 論

I 地形分類図	17
II 表層地質図	22
III 土壌図	24
IV 水系および谷密度図	27
V 傾斜区分図	29
VI 土地利用現況図	30

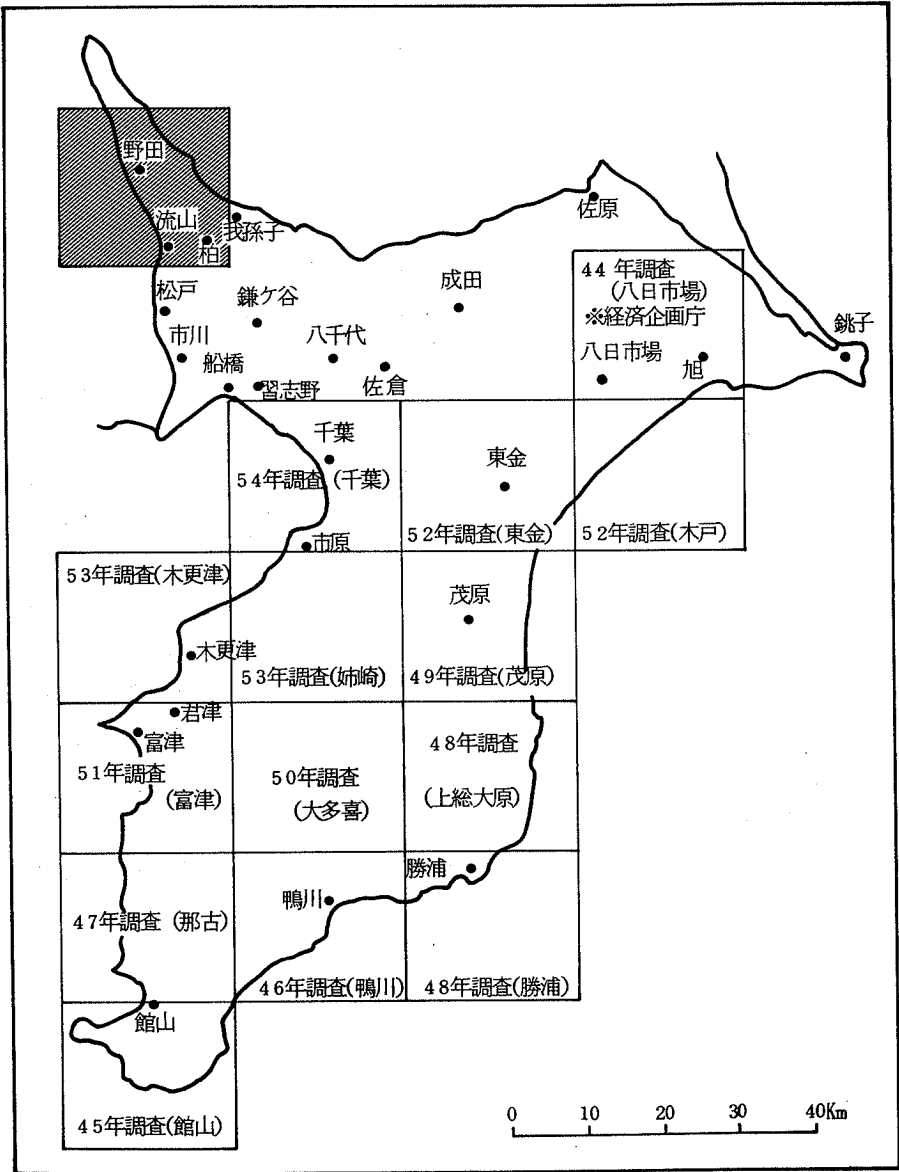
ま え が き

1. 本調査は、千葉県が事業主体であり、千葉大学の協力を得て行なったものである。
2. 本調査は、自然条件のうち、土地の基本的性格を形成している地形、表層地質、土壌の3要素を基礎とし、これに水系・谷密度、傾斜区分、土地利用現況を加味し、その結果を相互に有機的に組合せることによって科学的な土地利用の可能性を分類するものである。
3. 本調査結果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿である。

調査・成果の作成機関及び担当者

企画調整編集	千葉県企画部企画課	課長	小林成朗
	"	課長補佐	横田一成
	"	係長	藤野裕生
	"	副主任査	浜上興一
	"	主任主事	鶴巻成男
調整連絡	千葉県農林部農産課	係長	北川智也
	" 林務課	主査	林田善
地形調査	千葉大学理学部	文部教官	川崎逸郎
	" 教育学部	"	白井哲之
表層地質調査	千葉大学教養部	文部教官	近藤精造
	" 理学部	"	高井憲治
土壌調査	千葉県農業試験場	地力保全 研究室長	松本直治
	"	技師	安西徹郎
	"	"	中村千明
	千葉県林業試験場	"	岩井宏寿
	"	"	石谷栄次
開発関連調査	千葉大学理学部	文部教官	川崎逸郎
	"		宮脇信広
	" 園芸学部		飯田有貴夫
{水系・谷密度 調査 傾斜区分調査 土地利用現況 調査			

位置図



總論

I 位置および行政区画

1. 位置

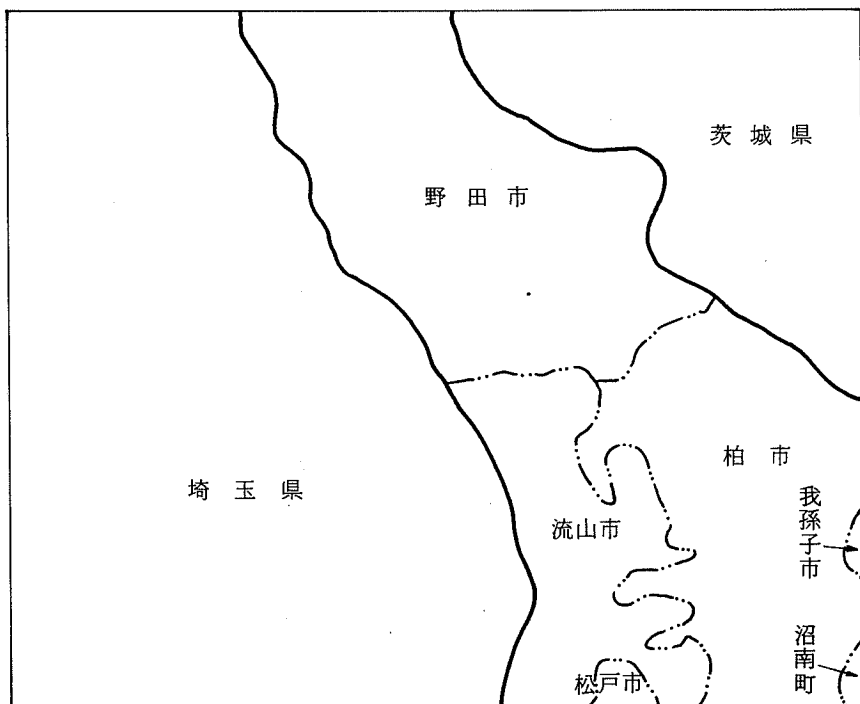
「野田」図幅の経緯度的位置は、東経 $139^{\circ} 45'$ ～ $140^{\circ} 00'$ ，北緯 $35^{\circ} 50'$ ～ $36^{\circ} 00'$ の範囲である。

この中で、本県は、下総台地の北西部、利根川と江戸川が同台地を挟むところに位置している。

2. 行政区画

本図幅の行政区画は、野田市・流山市のほぼ全域、柏市の大部分、松戸市・我孫子市・沼南町の一部区域の5市1町からなる。

第1図 行政区画図



Ⅱ 人 口

本地域は、首都東京から30 Kmと近距離にあり、昭和30年代から、東京の都市膨張が激化するなかで、東京へ近くかつ地価が比較的安価であったため、住宅・工業団地の開発が活発になされ、人口が急激に増加した。

なかでも、東京通勤者を主とする社会増が著しく、また、人口の転出入移動の激しい地域でもある。

この傾向は、既に市街地が形成されている国鉄常磐線等鉄道の沿線から更に深く都市化が進み、今後とも続くものと予想される。

第1表 世帯数、人口、人口の移動状況

区 分		年 次					
		昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年	昭和53年	
野 田 市	世 帯 数	18,742	20,255	21,020	21,835	22,698	
	人 口	75,389	78,193	80,419	83,166	86,082	
	移動 状況	総 数			2,226	2,747	2,916
		自然増減	908		770	744	769
		社会増減	892		1,456	2,003	2,147
柏 市	世 帯 数	54,572	57,445	60,453	63,500	66,494	
	人 口	193,151	203,065	211,613	220,548	229,179	
	移動 状況	総 数	12,332		8,548	8,935	8,631
		自然増減	3,560		3,110	2,912	2,931
		社会増減	8,772		5,438	6,023	5,700
流 山 市	世 帯 数	21,792	23,059	24,822	26,660	27,978	
	人 口	77,360	82,936	89,059	95,518	100,160	
	移動 状況	総 数	5,783		6,123	6,459	4,642
		自然増減	1,323		1,131	1,148	1,121
		社会増減	4,460		4,992	5,311	3,521

- 注) 1. 昭和50年数値は、国勢調査による。
2. 昭和49年及び昭和51年～昭和53年数値は、昭和45年又は昭和50年の国勢調査の世帯数、人口を基礎とし、毎月市町村からの出生数、死亡数及び転入数、転出数並びに世帯数の増減報告資料により推定したものである。

Ⅲ 地域の特 性

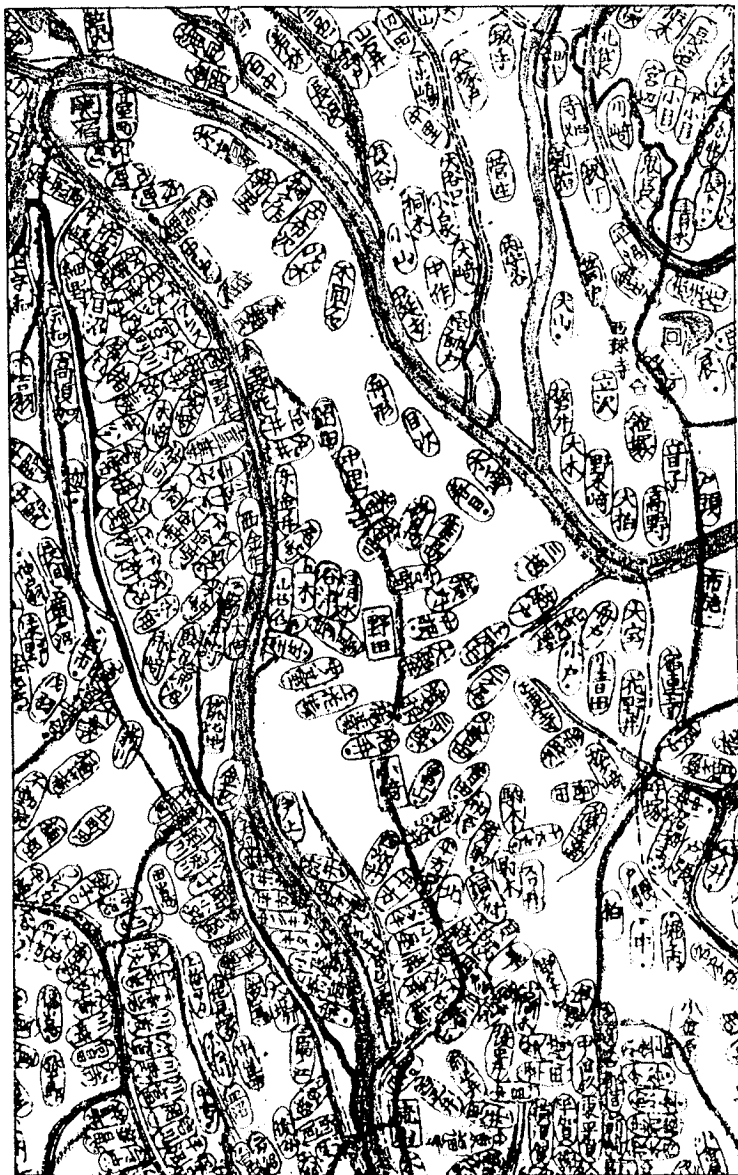
1. 自然的特性

野田図幅は千葉県の北限にあたる水海道図幅の南に位置する。西は江戸川、東は利根川を隔てそれぞれ埼玉県、茨城県に接する北西～南東に広がる地域である。図幅の北は関東平野の中央に近く「3県の雞の聲が聞える」ところでもある。そして夏の雷と集中豪雨の通りみちであり、冬は筑波風の空っ風が吹きまわるところである。本図幅の上空は羽田空港に向う国内線の航路にあたり機内からの観察がよくできる。新潟空港を10時に離陸すると約30分で本図幅に進入すると共に急角度で高度を下げ羽田に向う。機上からみると、水田、畑地の広がりの中に計画的な道路と新しい造成地や団地が入り組み地域全体が妙に立体的に見えて平坦地とは見えない。いまひとつ地上のところどころに暗緑色に見える人工針葉樹林の色と、休耕田のあとの谷地の形をそのまま残している雑草や灌木の淡い緑色と良い対照である。秋から冬では針葉の常緑はそのままであるが、休耕田の谷地は枯れ草色となり、雪の降ったあとは融けなくて残っているところとなる。

野田図幅地域は埼玉・茨城両県に接しておりながら、都市形態や土地利用現況からみる地上景観は千葉・埼玉・茨城各県三者三様で、それぞれが独立景観をつくっている。最もにぎやかに見えるのが千葉県側である。北にある野田市と南の新興の柏市附近には工業団地があるが、周囲の土地利用状況のためか静的な感じを与える。利根川の流れに沿ってきた海の霧と川の霧が本地域で混りあって生じた適度な湿りぐあいと豊富な水が「しょう油」の醸造に大きな役目を果たしたのは昔のこと 1,000～1,500ミリの年間降水量はそのままだが、今は化学調味料、食品工業という名の新しい衣替えを行っているところが本図幅の野田市であろう。

本図幅の野田、柏地域は近年住宅団地の急増が目立つところであり（柏が特に著しい）、これら団地の居住者の通勤圏は大部分が東京地域あるのをみると、埼玉・茨城の両県に接しておりながら、両県の影響が少ないのは、図幅の南から北に押し上ってくる東京という大都市の強い圧力によるものであることがわかる。

第2図 野田図幅の古図（天保14年壬寅）（千葉大 川崎所有）



図の左上に関宿、南に下って野田、山崎、流山という台地の中央を通る当時の重要な交通路（関宿街道）に沿って並ぶ大きな宿場名に今日の地名を見ることができる。現在の柏市の名は図の右下端にある小判印の中に柏の文字を読みとれる。

利根川、江戸川は現在の土地利用現況図の水田のところを流れている。

(1) 地 勢

野田図幅内の千葉県側は利根川と江戸川の間で広がる梯形をした台地が大部分それも比高の小さい(5~10m)台地である。周囲が低地のため、台地の縁は図上でははっきりするが、前記のように機上からみるとはっきりした台地には見えない。この台地の縁には先史時代の遺跡(貝塚)が分布しており、その一部は台地に入る谷に沿っても分布している。

これらの貝塚は研究の結果、先史時代の人類の生活のあとを物語るもので、貝塚の位置はそのころの海水面の位置をあらわすものであろうといわれている。その時期(すなわち、野田、柏の台地周辺に海が寄せていた頃)はB.C. 5,000年ともB.C. 1,000年ともいわれている。地形からみると台地の比高と谷の形態、また更級日記の記載等を考えると本図幅の地域が古い東京湾の水面から顔を出したのは、それほど古い時代ではなかろう。次に台地に入る谷の形態を詳しくみると、海水面が台地周縁に接していた状態は数回に亘って継続的にあった(つまり海面が引いた時期があった)と考えることができる。更級日記の記録が正しいならば、この日記の書かれた頃本図の江戸川の側から浅草・葛飾地域は三角洲の生長期に相当していたのであろう。そのころの海岸と植生の状態について次のように記されている。「一 浜も砂子白くなどもなく、こひちのよりにて、むらさき生ふと聞く野も、あしおぎのみ高く生ひて、馬に乗りて弓もたる末見えぬ子で、高く生ひ茂りて一」、これが今からおよそ900年前の江戸下町の姿、今日の江東地区一帯である。つまりこの更級日記の頃は野田・柏の台地の下は湿地帯がひろがっていたことになる。古図をみると古い重要な街道は野田～流山を通っている。

地形分類図の説明にある切峯面図をみると本地域は南から北に向ってゆっくりと隆起した状況が読みとれる。これは前記貝塚の位置から充分なづけることである。以上のように地盤が隆起し台地がつくられたのが地質時代からみると何分、新しい時代のことなのである。そして関東ローム層がのっている台地の部分を除いて、台地に入る谷や周縁の低地では、海水が引いたあとの土地には川が運んできた土砂・粘土がつみ重なり、典型的な軟弱地盤をつくりあげた。一部にはピートを含むところもある。このような地盤のところでは十分に調査を行わないで施工すると地盤沈下の悲劇をまねくので、施工側と該当地域の自治体の十分な連絡が必要である。

(2) 気 候

この地域は、比較的寒暖の差がある内陸性的な気候である。

年間平均気温の平年値は 14.3℃、年間降雨量の平年値は 1,322 mm である。

第 2 表 月別平均気温・降水量

種別 \ 月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
平均気温(℃)	2.0	3.3	8.3	13.8	17.3	20.7	25.4	24.6	23.8	17.5	13.2	6.9	14.7
降水量(mm)	20	23	137	97	121	185	172	415	208	54	66	31	1,529

銚子気象台 野田観測所 昭和 52 年資料

(3) 動植物

本地域は、利根川と江戸川にはさまれた地域で、自然環境からは台地と谷底平野に大きく地形を分類することができる。それぞれ独立した自然相をもっている。

ここでみられる動植物は次のようである。

植物についていえば、台地周縁の斜面に林地が多くみられ、スギ・ヒノキ・マツ類の植林地となっている。常緑広葉樹ではシラカンが比較的多くみられる。台地を刻む谷津田には、湧水が多く見られ、ハンノキの林が成立しているところもあるが次第にその相が変りつつある。利根川・江戸川・利根運河に沿った堤防や河川敷には、ヨシを中心とした湿地の植生やススキ・ヨモギ・チガヤ・ヒメジョオンなどの草地植生がみられる。

動物では、利根川流域の水田や草原にホオジロ・ヒバリ・セツカ・ビンズイ・ツグミ・タヒバリ・アオジなどの鳥類がみられる。その他の動物では、イタチ・ジネズミ・アカネズミなどの小哺乳動物がみられる。有名な野田のサギは次第にその数が減少しつつある。

参考文献

1. 新版千葉県植物誌：千葉県生物学会編（1975）
2. 千葉県の自然（三訂版）：千葉県自然研究会編（1977）
3. 千葉県統計年鑑（1977）：千葉県
4. 千葉県史料 — 原始古代編 —（1963）：千葉県
5. 富士見拾三州与地図（1843、天保14年）
6. 20万分の1土地分類図（千葉県）（1972）：経済企画庁
7. 千葉県の歴史 — 小笠原長和・川村優 著 —（1970）：山川出版社
8. 風景あるくの記 — 川崎逸郎 著（1961）：正文館

2. 社会・経済的特性

本地域は、野田の醤油・流山の味噌といった醸造業や首都を控えた都市近郊型農業を主産業として発展してきた。

古く、江戸時代から明治時代にかけては、東北地方・北海道と江戸（東京）を結ぶ利根川～江戸川ルートにあたる野田・流山・柏の河港が水運の要衝として栄えたところでもある。

戦後、農業県からの脱皮と雇用の拡大を目差した昭和30年代の産業振興期を迎え、各市に企業誘致条例が制定され、県内でも早い時期に内陸工業団地の造成が行われ、工場の進出が活発化した。

一方、これまで田園都市の性格を残してきた本地域は、東京のドーナツ化現象の影響を受け、昭和30年代以降大規模な住宅開発がなされ、人口が急激に増加し、現在では東京のベッドタウンの様相を呈している。

本地域は、県内でも特に東京指向の強い地域であり、地域としての自立性をどこに見出すかが今後の重要な課題である。

このため、国鉄柏駅東口再開発事業により、商店街の近代化・商業機能の充実に伴う新しい街の顔づくりに努力が払われている。

第3表 就業構成

区 分		野 田 市		柏 市		流 山 市	
		人 数	構 成 比 (%)	人 数	構 成 比 (%)	人 数	構 成 比 (%)
総 数		3 6 2 3 9	1 0 0.0	8 5, 8 2 1	1 0 0.0	3 4, 3 7 8	1 0 0.0
第 一 次 産 業	計	3, 9 4 6	1 0.9	3, 9 8 4	4.6	2, 0 9 4	6.1
	農 業	3, 9 4 2	1 0.9	3, 9 4 7	4.6	2, 0 6 4	6.0
	林 業・狩 猟 業	—	—	1 2	0.0	2	0.0
	漁 業・水 産 養 殖 業	4	0.0	2 5	0.0	2 8	0.1
第 二 次 産 業	計	1 5, 1 4 0	4 1.8	3 0, 6 9 2	3 5.8	1 2, 7 0 3	3 7.0
	鉱 業	9	0.0	3 0	0.1	1 2	0.0
	建 設 業	2, 8 2 8	7.8	8, 0 8 2	9.4	2, 8 3 6	8.3
	製 造 業	1 2, 3 0 3	3 4.0	2 2, 5 8 0	2 6.3	9, 8 5 5	2 8.7
第 三 次 産 業	計	1 7, 0 5 1	4 7.1	5 0, 7 5 1	5 9.1	1 9, 4 4 5	5 6.6
	卸 売 業・小 売 業	6, 8 2 1	1 8.8	2 0, 1 5 5	2 3.5	7, 2 6 4	2 1.1
	金 融・保 険 業	8 7 9	2.4	3, 7 2 2	4.3	1, 9 0 5	5.6
	不 動 産 業	1 9 3	0.5	9 5 9	1.1	3 2 3	0.9
	運 輸・通 信 業	2, 1 2 7	5.9	7, 5 1 4	8.7	2, 7 3 1	8.0
	電 気・ガ ス・水 道 ・ 熱 供 給 業	3 1 8	0.9	6 5 6	0.8	2 7 2	0.8
	サ ー ビ ス 業	5, 8 1 6	1 6.1	1 4, 0 6 1	1 6.4	5, 3 0 0	1 5.4
	公 務	8 9 7	2.5	3, 6 8 4	4.3	1, 6 5 0	4.8
分 類 不 能 の 産 業		1 0 2	0.3	3 9 4	0.5	1 3 6	0.4

昭和50年 国勢調査資料

Ⅳ 主要産業の概要

1. 農 業

本地域の農業は、大消費地である東京都心へ30 Kmと至近距離にある立地条件を活かした都市近郊型農業として土地生産性の高い農業経営がなされてきている。

農業生産は、畑作を中心に稲作・畜産等が行われており、また、畑作では特に野菜の比重が高くなっている。

畑作の作付状況では、麦類・いも類・雑穀豆類に代わり野菜類・未成熟豆類が多くなっており、主要作物は、ねぎ・にら・ほうれん草等の葉茎菜の外、かぶ・きゅうり・枝豆などである。

施設園芸としては、トマト・きゅうり・にら等が生産されている。

また、近年緑の保護と相俟って植木類の栽培が増加する傾向にあり、その生産団地化も計画されている。

水稻は、※ 2,122 ha（昭和52年普通作物調査）で作付されており、県内作付面積の2.4%にあたる。

畜産は、野田市で採卵鶏の飼育が盛んである。

注 ※の数值は、野田市、柏市、流山市の合計値である。

2. 工 業

本地域の工業は、江戸時代より始まる野田の醤油、流山の味噌等の醸造業に代表される食料品製造業が主力である。

しかし、昭和30年代後半から、その地理的条件により、鉄骨・橋梁等金属加工工場、製パン等食料品工場、機械・金属工場などが逐次進出をし、国道16号沿いなどに県内でも早い時期に内陸工業団地が形成されて、工業は多様化してきている。

第4表 昭和53年産業中分類別事業所，製造品出荷額一覽表

産業中分類	事業所数	従業者数(人)			製造品出荷額 (万円)
		計	常用者 労働者	個人・家 族従業者	
野田市計	423	10,313	10,011	302	15,955,145
食料品	52	2,633	2,598	35	6,131,955
家具・装備品	14	219	212	7	313,934
パルプ・紙	8	308	306	2	824,910
化学	8	381	381	—	600,315
窯業・土石	14	206	202	4	339,452
鉄鋼	8	173	169	4	517,516
非鉄	6	549	549	—	809,577
金属製品	83	2,713	2,645	68	4,053,637
一般機械	43	477	438	39	425,777
その他の製造業	72	949	894	55	752,851
その他	115	1,705	1,617	88	1,185,221
柏市計	675	14,479	14,040	439	26,166,243
食料品	41	2,248	2,227	21	9,171,571
パルプ・紙	25	544	524	20	954,796
化学	15	463	463	—	692,391
ゴム	7	357	352	5	451,176
窯業・土石	24	866	861	5	1,289,896
非鉄	8	442	441	1	1,559,076
金属製品	137	2,134	2,029	105	2,002,281
一般機械	71	1,493	1,466	27	1,610,369
電気機械	31	1,853	1,834	19	4,184,470

産業中分類	事業所数	従業者数(人)			製造品出荷額 (万円)
		計	常用 労働者	個人・家 族従業者	
その他の製造業	111	1,526	1,437	89	2,484,294
その他	205	2,553	2,406	147	1,765,923
流山市計	293	3,999	3,777	222	4,306,359
食料品	19	503	489	14	816,729
パルプ・紙	9	227	222	5	389,578
なめしかわ	19	178	155	23	131,499
窯業・土石	7	176	174	2	214,668
金属製品	60	473	423	50	572,768
一般機械	26	264	251	13	262,000
その他の製造業	78	1,398	1,341	57	1,586,406
その他	75	780	722	58	332,711

(注) その他の欄は、事業所数又は製造品出荷額の少ないもの。

昭和53年12月31日現在

「昭和53年工業統計調査結果報告書」(千葉県企画部統計課)

3. 商 業

本地域の商業は、従来、工業の中心である野田と交通路の要にある柏の二つを核として営まれてきたが、首都東京へ30 Kmの至近距離にあるため、東京商圏の影響を強く受けていた。

しかし、昭和30年代から国鉄常磐線沿線を中心に人口が急増し、また、昭和48年の国鉄柏駅東口再開発事業が実施されたこと等により、商業力の目覚ましい充実を見せた柏市は、後背地の購買力を吸収して広域商業都市としての地位を確立し、消費者の地元購買の傾向がはっきりしてきている。

4. 観 光（史跡・名勝）

本地域は、利根川・江戸川等の水辺を中心にのどかな田園風景を残し、都心から1時間前後で到達が可能であり、手軽なハイキング、ドライブコースとして利用されている。

野田市の清水公園は、桜・つつじの名所であり20万 m^2 を有する園内には運動場・キャンプ場・児童遊園等があり、四季を通じて楽しめる。

柏市の北東、利根川を眼下に望む高台にある東海寺は、別名「布施弁天」と呼ばれ、関東三大弁財天の一つに数えられている。

利根川と江戸川の間約8 Kmを結び、野田市の南市境を流れる利根運河は、明治22年に完成し、蒸気船が上下し賑わいをみせたが、鉄道の開通により衰退した。その後、昭和50年改修され野田緊急導水路として生れ変わり、堤はハイキングコースとして親しまれている。

松戸市最北端に位置する日蓮宗の名刹「本土寺」は、境内にアジサイが2万本近くあり、6～7月にかけて咲き誇り「アジサイ寺」とも呼ばれ訪れる人も多い。

V 開 発 の 現 況

1. 道路・鉄道

この地域の道路は、柏市内で直交する国道6号と同16号がそれぞれほぼ東西及び南北に走り、首都東京及び県都千葉市を結び本地域の基幹道路として重要な役割を果たしている。

更に、主要地方道の松戸野田、結城野田、市川柏の各線が国道2路線に結節し基幹ネットワークを形成している。

また、常磐自動車道が、昭和55年度における一部供用開始を目途に工事を進めている。

鉄道は、国鉄常磐線が国道6号に沿い本地域を横断し、また、同線から東武野田線、総武流山電鉄、国鉄武蔵野線の3線が樹枝状に散っている。

国鉄常磐線は、昭和46年4月に我孫子駅・綾瀬駅間が複々線化されると同時に営団地下鉄千代田線との相互乗入れも開始され、都心への輸送力が増強されたが、近年、通勤・通学等のラッシュ時の混雑度は限界に近付いている。

第3図 道路・鉄道図



2. 水資源

この地域の河川は、利根川水系に利根川、江戸川等8河川が流れ、湖沼として手賀沼があり、農業用水のみならず都市用水としての水需要にも応えてきた。

近年、都市化に伴う都市用水の需要が高まっており、その重要性は増してきている。

なお、首都圏の都市用水を確保するため利根川と江戸川を結ぶ北千葉導水路が建設中であり、同導水路完成までの間、利根運河を改修し、暫定的に野田緊急導水路として利用を図っている。

各論

I 地形分類図

「野田」図幅全体の地形を大観すると、下総台地と利根川低地とからなる。

図幅の北東部は茨城県域の台地がしめる。この台地の地形的性質は、中央部に
ある千葉県域の下総台地より高度的にやや高い台地である。しかし、これも下総台地
の東部や南部の台地と考えている。これも特に下総台地というのは地形の性質が同
じであるということだけでなく、この地域が歴史的には下総国であるからでもある。

利根川をはさんで兩岸に展開する低地を利根川低地とする。利根川は県境となっ
ているが、行政界で兩岸の低地の性質が異なるわけではない。この低地は本来、香
取海（下利根川）へ注ぐ毛野川水系（鬼怒川水系）が低地の主体を構成したもので
あり、1654年（承応3年）以降、利根川流路が鬼怒川水系に付替えられたこと
により、急速に陸化したものである。それ故、利根川流路ははじめから人為の要素
がつよく、その河道安定のために多くの改修がなされてきた。本図幅にもその様子
がうかがえる。

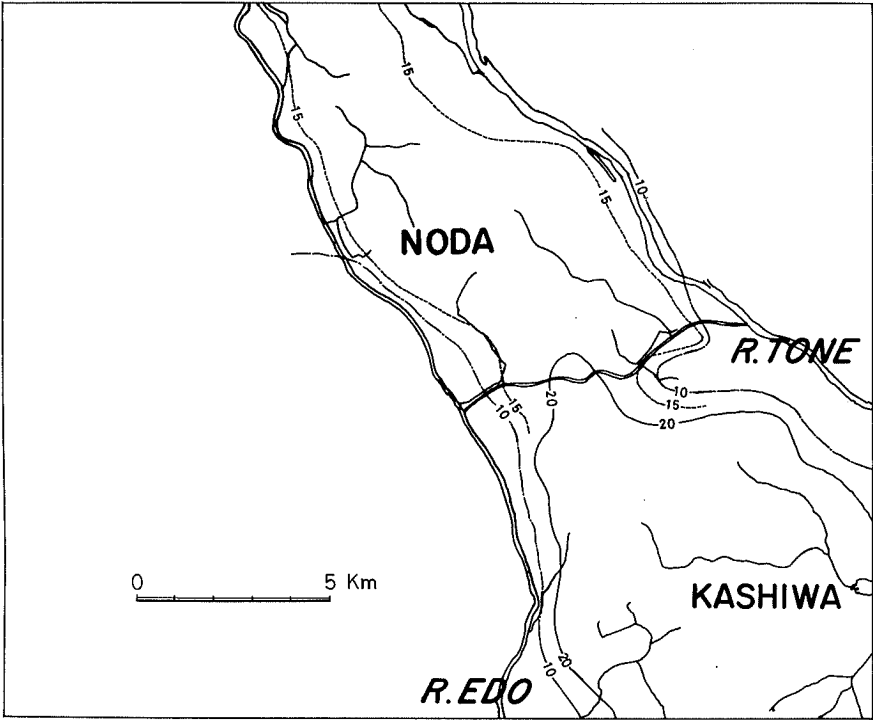
図幅中央部の台地は千葉県域に属する。これについては後述するが、下総台地全
体としては北西部に属し、利根川と江戸川流路にはさまれた部分である。

本図幅の西半分は低地である。この広い低地の大部分は埼玉県域であり、千葉
県域は江戸川と下総台地との間の幅1～2 Kmが属するにすぎない。この埼玉県域を主
とする低地は、東流する以前の利根川水系、渡良瀬川水系さらには西に付替えられ
る以前の荒川などの水流が形成した平野である。ここは縄文前期（6000～5500
年前）の海進により奥東京湾ともいべき入江が生じ、これを前記諸水系が埋積し
ていったものである。この地域では河道は著しく蛇行し、その両側に自然堤防がよ
く発達しており、自然堤防帯というべき平野である。その意味でこの低地は利根川
低地と称することができる。しかし、現利根川流路はすでに東遷しており、ここを
流れていないのであるから、利根川の名称を地域名称とすることは適当でない。

本図幅中央部の台地は一般に下総台地と称される千葉県北部一帯の台地の一部分
である。下総台地は南部では高さ100mを越すが、本図幅域では25m以下の地域が
大部分をしめており、下総台地の高度分布の中では北の低い地域を代表している。

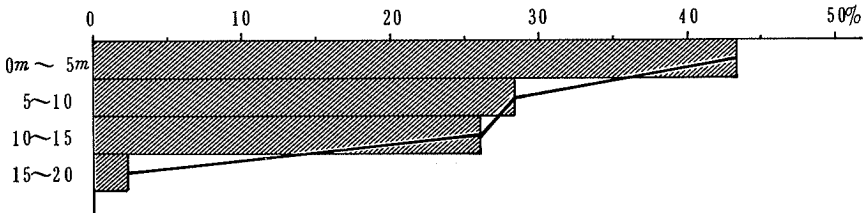
またこの地域は東に利根川沿岸の低地を西に江戸川の低地をひかえ、台地の東西
方向の幅は3～7 Km、北西から東西へ約23 Kmと細長く、低地の中へ半島状に突出

第4図 切 峯 面 図



本図の中にある等値線は、図幅を縦横 20 等分した各方眼の中の最高点の値を読みとり、等値のところを結んで引いてつくったものであり、本図は高さの傾向を読みとることができる。

第5図 起伏量値の分布



した部分となっている。台地の崖は概して利根川低地側で明瞭で高く、江戸川側では北半は低く不明瞭、南半では高い傾向がある。またこの台地を侵食する谷は台地尾根部がのびる北西―南東方向に平行するようにのびるものが長く、これと直交する方向の谷は少くかつ短い。台地面はこれらの谷によって刻まれているが、かなり広くのこされている。

台地面の大部分は下総下位面であり、一部にこれより低い台地面がみられるほか、侵食谷底からわずかに高い段丘がみられる地域もある。

この地域のもう一つの地形的に注目すべきことは人工による地形改変である。これは千葉県域各地でみられることであるが、目立つものとしてはつぎのようなものがある。

台地部分では、野田・柏・流山などの宅地造成、工業団地造成による台地面および台地斜面の改変がかなりみられる。ゴルフ場も地形を一部改変している。

低地部分では利根川河道の改修、旧水路の埋立があり、利根運河の開さくは1890年（明治23年）である。近年は柏地区の大津川支谷の全面的盛土や利根川沿い低地の盛土による宅地造成が進行中である。流山や野田の江戸川低地も盛土や排水路整備により土地整備事業がなされた。低地帯への盛土による都市的土地利用が高まっているが、盛土は水害に対しては一応の有効性はあるものの、地震や地盤不等沈下など地盤災害の側面に問題をかかえていることに十分留意すべきであろう。

これらのことを考慮して本図幅千葉県域をつぎのような地形地域に区分した。

I 台地

I a 野田―柏台地

I b 吉春台地

II 低地

II a 利根川低地

II b 江戸川低地

II c 手賀沼低地

I 台地

野田―柏台地（I a）

柏市街や野田市街の主要部がのり、図幅東南部の柏から北西部の野田へ長さ約23 Km、幅3～7 Kmの台地を野田―柏台地とした。これは下総台地の一部を構成するも

のであり、立川期、武蔵野期の火山灰層をのせ、粗砂層（河成）からなる台地である。

台地の高さは台地の東西の分水界付近でみると、柏市中心部で22m、柏通信所跡で18m、野田市横内で17m、野田市中里で15mときわめて変化に乏しく、東南から北西に徐々に低下している。この台地は、他地域の下総台地と同じく侵食谷である谷津田に刻まれているが、原面の残り方はよく、豊四季、初石、十余二、野田市横内などには広く谷の入らない平坦地がつづく。これらはいずれも小金牧時代の放牧地であり明治期以来の開墾地で地名にそれがのこされている。

台地面には江戸川台や豊四季団地など多数の住宅地が造成されており、基本的に住宅地としては良好な地形状態である。

台地を刻む谷津田には二つの型があるようで、手賀沼に入る大堀川などのように谷幅が広く、台地斜面はゆるく、浅い谷と台地を深くきざみ急な崖で台地と接するものがある。前者の谷頭部を中心に盛土・埋土による宅地造成が多くみられ、十余二工業団地もこうした地形を背景にしている。ここでは湧水や泥炭層はあるが比較的うすい。これに対して後者の谷は利根川や江戸川など広い低地に直接つながるものが多く、基本的に低湿である。柏市大室地区などではここに大規模盛土による宅地造成がなされている。

台地斜面は利根川低地にのぞむものが出入が多く約15mの比高であるが、江戸川低地に面しては平滑で流山から野田まで約10mの比高の崖がゆるい弧をえがいてよく連続する。

なお、この台地は野中と座生間約5Kmで江戸川に、瀬戸と山崎間約5Kmで利根運河に人工的にきられている。

吉春台地（I b）

野田市吉春、谷津、五木は野田－柏台地面より2mほど低い台地が狭くみられる。これを吉春台地とした。これは谷底から約10mの比高をもっており、立川火山灰層をのせるが、野田－柏台地とは不明瞭な交接部でかわっており、台地化される際、局部的に台地の平坦化が行われたものである。

II 低地

利根川低地（II a）

本図幅では、利根川は野田市小山西側から柏市布施地先まで約15Kmにわたって

北西から南東に流下し、左岸から鬼怒川をあわせている。茨城県側の台地と千葉県側の台地との間の低地を利根川低地とする。この低地の幅は約3～4kmである。この低地の中を利根川は流路をしばしばかえたようであり、芽吹大橋付近や瀬戸のゴルフ場、布施付近などには旧流路のあととおもわれる湿地がみられる。また千葉県と茨城県の境は大部分利根川流路であるのに、野田市木野崎付近では大きく流路をはずれて茨城県側にふくらんでいるが、これは、この部分が旧利根川水路であったためであり、地形的にも旧水路の地形が選定される。堤外地（河原）の幅は700m～1kmに達し高さ6mに達する本堤が築かれている。堤内地は柏市域では、旧水路を含めて耕地整理が行われ、微地形は不明瞭である。

江戸川低地（Ⅱb）

江戸川は野田市野中と座生間約5kmを台地を開さくして流れており、その下流約13kmも、高さ7.5mに達する高い堤防で囲まれている。本来この河川は大井川（大堰川）とよばれ渡良瀬川系統の河川であったが、今日利根川の放水路的役割りをもち強く人為をうけている河川となっている。地形的にみるとこの河川は人為の影響を受ける前は自然堤防を発達させながら流れる河川であり、自然堤防と旧流路は埼玉県側によくのこされている。下総台地と江戸川の間のみならず幅1km強の所でも自然堤防はみられ、今上付近や流山市中核部はこれにあたる。千葉県側の大部分はこうした汎濫性の河川の後背湿地的性格がつよい所と思われる。

国鉄武蔵野線南流山駅を中心とする低地一帯には、大規模な土地整理事業が行われ、広域にわたって地形改変が行われ、都市化が進行している。

手賀沼低地（Ⅱc）

図幅東南端に手賀沼の一部が入る。手賀沼は千葉県北部有数の湖沼であり、竜ヶ崎図幅で広いが、本図幅域の侵食谷の流末でもあるので区別した。手賀沼は香取海の一入江であったが出口の木下付近を利根川の東遷による土砂堆積によりふさがれ湖沼化したものである。水深2mと浅く近世以来数度の干拓が試みられたが、近年は干拓で沼は二分し約半分以下に縮小した。湖尻にあたる本図幅内でも北柏付近はかつての干拓地は住宅地にかわっている。なお大堀川支流地藏堀は上流から下流まで約6kmにわたって切土と盛土による地形改変が行われた。

（千葉大学文部教官 川崎逸郎）
 “ “ 白井哲之

Ⅱ 表層地質図

本地域は、台地を構成する洪積世の下総層群と関東ローム層、および低地を構成する沖積層からなる。その層序は第5表のとおりである。

第5表 層 序

時 代	層 群	地 層	
沖 積 世		沖 積 層	
洪 積 世	関東ローム層	立川ローム層	
		武蔵野ローム層	
		常 総 層	
	下 総 層 群	成田層	木下部層
			上岩橋部層

1. 未固結堆積物

1-1 埋立地堆積物 (r)

この堆積物は、野田市、柏市、流山市の各地の台地に挟まれた谷を埋めて作られた造成地を構成している。ローム、シルト質砂、砂などからなり、人為的な軟弱な地盤となっている。

1-2 泥がち堆積物 (m)

泥がち堆積物は、利根川、江戸川に面した低地および台地を刻む支谷沿いに分布し、主として田地として利用されている。多くは地表から数mまでの部分を構成し、その下は成田層の砂になっている。

1-3 砂がち堆積物 (s)

利根川、江戸川沿いに砂堆を作って存在している。細砂～中砂から構成され、多くは畑地として利用されている。

2. 半固結堆積物

2-1 砂₁ (s₁)

台地の縁辺部に、関東ローム層の下に存在する。特に、柏市の篠籠田、野田市上三ヶ尾、西塚付近などでみられる。主として木下部層からなる。細粒、中粒、粗粒砂からなり、シルト、礫を挟むことがある。

3. 火山性岩石

3-1 ローム₁ (L₁)

関東ローム層のうち立川ローム層のみから構成されている部分で、低位の台地面の地域に分布する。野田市七光台、利根運河南などでみられる。富士火山起源の火山灰の風化層を主体としている。

3-2 ローム₂ (L₂)

関東ローム層のうち、立川ローム層と武蔵野ローム層から構成される部分で、この地域の台地の大部分を占めている。富士火山起源の風化火山灰層を主とするが、下底近くに東京軽石層の鍵層がみられる。また、下位の成田層との間には、粘土層を主体とした常総層が存在する。

参考文献

- 関東ローム研究グループ (1965) : 関東ローム — その起源と性状 筑地書館
- 近藤精造・高井憲治 (1971) : 下総台地洪積層の構成物質について (第8報)
千葉大教養研究報告 B-4、81~85
- 近藤精造 (1972) : 下総台地洪積層の構成物質について (第9報) — 洪積層の
地質構造 千葉大教養研究報告 B-5、9~17
- 杉原重夫 (1970) : 下総台地西部における地形の発達
地理評 43、703~718
- 上杉陽ほか5名 (1977) : 関東地方の第四紀構造盆地の形成過程に関する一考察
地質学論集 14号、133~149

(千葉大学文部教官 近藤精造)

Ⅲ 土 壤 図

1. 台地の土壌

本図幅中にみられる台地は北部の野田市から南部の柏市まで連なる標高約 15 ～ 22 m の関東ローム層におおわれた起伏の緩やかな野田—柏台地と、野田市吉春一帯に広がる標高 17 m 前後の吉春台地に分けられる。

野田—柏台地には本図幅の畑地および林地の大部分が分布している。南北にのびる台地の背にあたる中央部は標高もやや高く、特に利根運河より南部の中央部は 20 m 前後であり、黒ボク土壌の八街統および八街 F 統が分布している。またごく小面積であるが台地の凹地や斜面下部の崩積地には厚層黒ボク土壌の文違統および文違 F 統がみられ、標高 15 m 前後の台地縁辺部および谷津の付近には火山灰が水の影響をうけて火山灰以外の母材を混じえて再堆積したと考えられる諸持統、船木統および混合度の高い香西 A 統、香西 B 統、椎崎統が分布している。このうち諸持統、船木統、香西 A 統は台地中央部より利根川寄りに、香西 B 統は台地中央部より江戸川寄りに分布面積が多い。これらの土壌と同じ淡色黒ボク土壌のうち、香西 C 統は野田市岩名の谷津に接する比較的急峻な斜面上の低湿な畑地にみられ、古火山灰を含む香西 D 統は柏市向根付近にみられる。上砂統は谷津に面した緩斜面上に分布しているが、その面積はわずかである。八街 F 統より腐植含量の低いあるいは腐植層のうすい上砂 F 統は台地縁辺部および谷津に面した斜面上に小面積ながら広範囲に分布している。また本図幅においては台地面にも分布がみられる。

吉春台地上に分布する畑地は淡色黒ボク土壌の香西 B 統であり、林地は同じく淡色黒ボク土壌の上砂 F 統で台地縁辺部の斜面上に分布している。

以上のように台地の土壌は畑地および林地とも土壌の母材は火山灰であり、標高が低くなるにしたがい水の影響をうけて火山灰以外の母材と混合する土壌が分布する。

2. 低地の土壌

本図幅中の低地の土壌は茨城県および埼玉県と境界をなす利根川および江戸川の沖積低地（沼澤原平野）とこれら大河川の中小の支流によって開析されて野田—柏台地に侵入する谷津群と、利根運河沿いおよび手賀沼系河川によって開析された谷津群に分布している。その大部分は水田として利用されているが、排水の良い所では

畑地の利用もみられる。

利根川に最も近い低湿地には粗粒グライ土壌の一松統が帯状にみられるが、沖積低地の大部分はグライ土壌のうち壤～壤粘質な土性の下総統、黒部統、馬立統が分布する。茨城県側の飛地もまた最も湿田の性格の強いグライ土壌の下総統である。阿部、船形付近ではさらにグライの程度が弱くなり、灰色低地土壌の平三統、村上統が小面積分布する。

利根川の沖積低地から野田一柏台地に侵入する小河川によって開析された谷津には火山灰の影響を強くうけた黒ボクグライ土壌の吉岡統が分布する。同じく土統は野田一柏台地の中央部にまで深く樹枝状に侵入した谷津に分布する。これら両土壌の違いは酸化沈積物によって区分される。

江戸川低地に広がる水田のうち、沖積面にはグライ土壌の黒部統、馬立統および灰色低地土壌の平三統が分布する。また江戸川からやや離れた上谷、下谷付近から下花輪の低地にかけて帯状に連なる地域には低湿な低位泥炭土壌の吉田P統、布佐P統、布佐統および黒泥土壌の安食M統が分布する。さらに江戸川の支流坂川によって開析された低地には吉田P統、布佐統、安食M統のほかに黒泥土壌の和泉統が分布する。これらの泥炭土の水田は利根川系小河川、利根運河系の数条の中小河川手賀沼系河川の大津川によって開析された低地にも分布している。

一方、野田一柏台地に最も深く侵入する大堀川によって開析された手賀沼低地の比較的排水の良い所には多湿黒ボク土壌の正蓮寺統が水田と隣接して分布している。流山市南部の江戸川低地には褐色低地土壌のなかでも強粘質な土性の松堀統が小面積ながら分布する。これらはともに畑地として利用されている

（千葉県農業試験場 安西徹郎）
 “ 林業試験場 岩井宏寿）

第6表 土 壤 統 一 覧

土 壤 群	土 壤 統 群	(注2) 土 壤 統 名	色 グライ	腐 植 層 序	層 序	酸 化 沈 積 物	(注1) 土 性	母 材	堆 積 様 式	備 考
黒ボク土	厚層黒ボク 土 壤	文違F統	YR/YR	全層腐植層	なし	なし	壤-壤	火山灰	風積	風積・再堆積
		文違統	YR/YR	全層腐植層	なし	なし	壤-壤	火山灰	風積	
		諸持統	YR/YR	全層腐植層	なし	なし	壤-粘-壤-粘	火山灰+洪積等	水積	
	黒ボク土 壤	八街下統	YR/YR	表層腐植層	なし	なし	壤-壤	火山灰	風積	風積・再堆積
		八街統	YR/YR	表層腐植層	なし	なし	壤-壤	火山灰	風積	
		船木統	YR/YR	表層腐植層	なし	なし	壤-壤	火山灰+洪積等	水積	
	多湿黒ボク 土 壤	正蓮寺統	YR/YR	全層腐植層	なし	あり	壤-粘-壤-粘(強)	火山灰+洪積等	水積	風積・再堆積(河成)
	黒ボクグラ イ土 壤	吉岡統	強グライ	—	なし	なし	—壤-粘	火山灰+洪積等	水積	風積・再堆積
		土統	強グライ	—	なし	あり	—壤-粘	火山灰+洪積等	水積	風積・再堆積
	淡色黒ボク 土 壤	上砂下統	YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	壤-壤	火山灰	風積	風積・再堆積、強いまつち
上砂統 (注3)		YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	壤-壤	火山灰	風積		
香西A統		YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	壤-粘-壤-粘(強)	火山灰+洪積等	水積		
香西B統		YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	壤-粘-壤-粘(強)	火山灰+洪積等	水積		
香西C統		YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	壤-粘-壤-粘(強)	火山灰+洪積等	水積		
香西D統		YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	壤-粘-壤-粘(強)	火山灰+洪積等	水積		
褐色低地土 壤	松泉統	YR/YR	表層腐植層なし	なし	なし	壤-砂-壤	火山灰+洪積	箱形・崩積	水積(河成)	
	布施統	YR/YR	表層腐植層なし	なし	あり	壤-粘-壤-粘(強)		水積(河成)		
組粒褐色 低地土 壤	松岸統	YR/YR	表層腐植層なし	なし	(あり)	砂-砂		水積(河成)		
灰色低地土 壤	村上統	灰褐色	—	なし	あり	—壤-粘		水積	水積	
	平三統	灰色	—	なし	あり	—壤-粘		水積		
グライ土 壤	グライ土 壤	馬立統	グライ	—	なし	あり	—壤-粘		水積	水積
		下粘統	強グライ	—	なし	なし	—壤-粘		水積	
	黒部統	強グライ	—	なし	あり	—壤-粘		水積		
粗粒グライ 土 壤	一松統	強グライ	—	なし	なし	—砂		水積		
泥 炭 土 壤	低位泥炭土 壤	吉田P統	強グライ	—	なし	なし	—壤-粘		水積・葉積	50cm以内に泥炭層出現
		布佐P統	強グライ	—	なし	あり	—壤-粘		水積・葉積	50cm以内に泥炭層出現
		布佐統	強グライ	—	なし	あり	—壤-粘		水積・葉積	50~80cmに泥炭層出現
	黒泥土 壤	和泉統	強グライ	—	なし	なし	—壤-粘		水積・葉積	50~80cmに黒泥層出現
	安食M統	強グライ	—	なし	あり	—壤-粘		水積・葉積	50cm以内に黒泥層出現	

(注1) 土性：「—」は表層、次層を示す。「・」は表層、次層に関わらず認められる土性を示す。

(注2) 本図幅において農地と林地の土壌統分類に際し、類似した土壌統間に若干の差を生じ、同一土壌統名を用いるのは適切でないかと判断されたので、林地の土壌統を-F統として農地の土壌統と区別した。

(注3) 香西A、B、C、D統：東金・木戸図幅の分類に準ずる。

未区分地について：本図幅において、未区分地を-1、-2に分類した。未区分地-1は従来未区分地と同じく都市・集落、採石場・採石場、湖沼とし、未区分地-2は施設緑地、ゴルフ場、造成地、未使用埋立地とした。

IV 水系および谷密度図

本図幅内の主な水系としては低地を流れる利根川本流、江戸川があり、台地にはこの両河川に流水する谷津田型の侵食谷がある。

利根川は本図幅では野田市小山西側から柏市布施まで約 15 Km を流れる。鬼怒川合流点で約 97 Km、利根運河派出点で 96 Km にあたり、中利根川下流部に相当する。左岸茨城県側からは鬼怒川や菅生遊水池からの流入があり、計画最大流量では鬼怒川は毎秒 2,000 m^3 の流入が予定される。しかし千葉県側からの主要流入河川はなく、江戸川へ 5,000 m^3/s 、利根運河へ 500 m^3/s の流出配分を計画している。

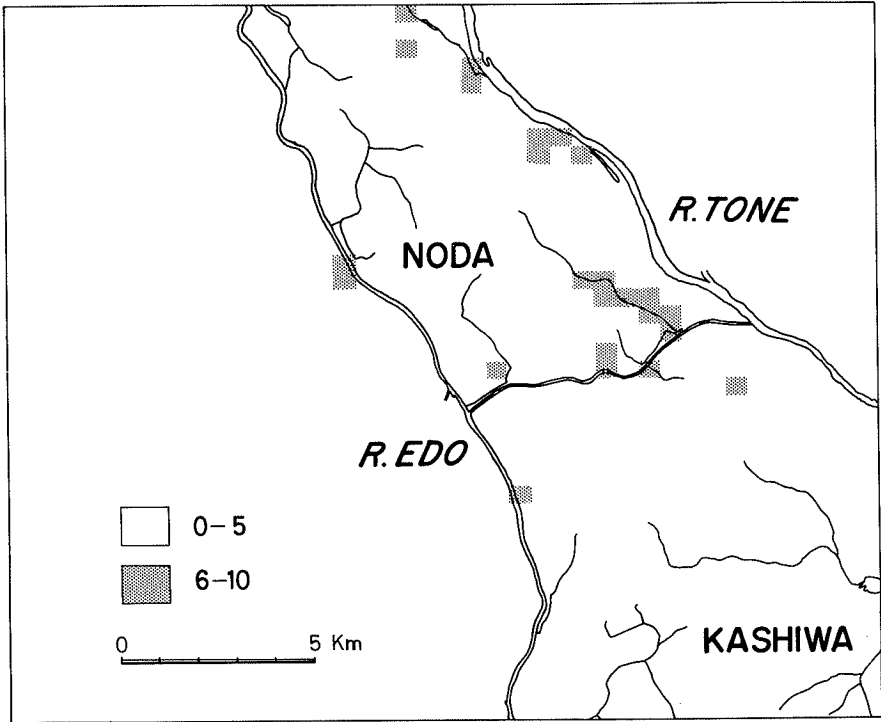
江戸川は関宿で利根川とわかれ東京湾まで 53.3 Km の 流路延長をもつが、本図幅は野田市野中から流山市木まで約 18 Km の流長をもつ、これに流入する主要河川は派川利根川とされる利根運河である。これは柏市山高野から谷津田と台地をひらいた約 9 Km の流長をもち、1890 年（明治 23 年）に水運を考えて開さくされたが、今日では利根川の水を配分するための役割りを担っている。

台地上の侵食谷の主なものは、利根川低地に通じるものとして野田市鶴奉から榎戸を経て瀬戸に至る約 7 Km の北西から南東に流れる谷が長く、他は短い。手賀沼低地に流下するものは大堀川とその支谷地藏谷で、大堀川は柏市西原から南東流し駒木で東流して手賀沼に入るもので流路延長 8.7 Km、流域面積は 30.9 Km^2 とこの種の台地に発生する谷としては長い。江戸川低地へは野田市堤台で江戸川に合する吉春台地が流域にみられる谷津田、松戸市と流山市の市域境となっている谷津田がある。

千葉県域の谷密度についてみると、全体に著しく低く 0-5 の地域が大部分である。これは低地と低い台地地域であることから当然である。谷密度がやや大（6-10）の地域は利根川沿いの野田市目吹付近、三ヶ尾付近がややまとまるだけで、他は分散的である。

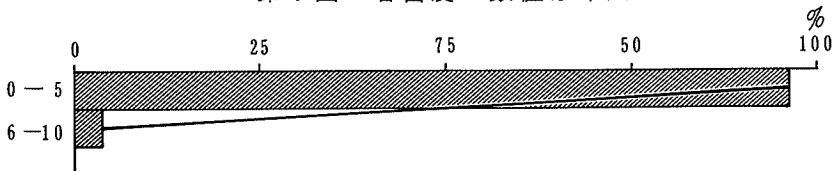
他図幅について試みてきた谷密度の数値分布を、本図幅千葉県域について検討すると、第 7 図のようになる。97 % が谷密度 0-5 であり、きわめて谷の少い起伏の少い平坦地が広がっていることがわかる。

第 6 図 谷密度分布図



図幅を縦横に 40 等分した方眼の中で、作業規程にしたがって谷密度をしらべ、階級区分を行ない分布図としたもの。階級区分は他図幅との統一上、0-5、6-10 の二階級となった。

第 7 図 谷密度の数値分布図



(千葉大学文部教官 川崎逸郎)
 (" " 白井哲之)

V 傾 斜 区 分 図

本地域は下総台地と利根川沿いおよび江戸川沿いの低地からなっている。したがって基本的に平坦であり、急な斜面は台地斜面にみとめられるにすぎない。

台地面はゆるく南東から北西に高度をさげるとはいえ、勾配を感じさせるものではなく、基本的に平坦であり、 0° または 1° 以下の地域である。

低地も平坦であり、 0° または 1° 以下の地域である。

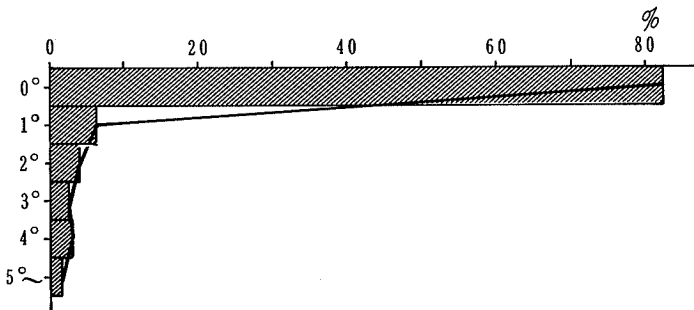
台地斜面の傾斜をみると、利根川沿い台地斜面と江戸川沿いのそれでは利根川沿い斜面に急なものが多い。とくに野田市船形から目吹、木野崎などの台地斜面、二ツ塚や榎戸などの谷津田をのぞむ斜面は 8° 以上 15° 未満程度の斜度が比較的良好に連続する。しかし江戸川側の台地斜面は 3° ～ 8° 程度である。

30° 以上の急斜面の崖は図幅の南東部の台地斜面で、手賀沼へ流入する大津川沿いの東向根や国道16号柏随道付近、流山付近である。

また 3° 未満や 3° ～ 8° といった緩い傾斜地は谷津田の谷頭部に分布しており、野田の中心市街地の北部や七光台付近、それに南の柏市の大堀川沿いの低い段丘面がこれにあたる。

従来他図幅についておこなってきた傾斜分布図は平坦すぎるため図化する必要がないが、傾斜分布の数値分布についてみると、 80% までが 0° であり、著しい平坦性があらわれている。

第8図 傾斜値の数値分布



(千葉大学文部教官 川崎逸郎)
 (" " 白井哲之)

VI 土地利用現況図

本地域の土地利用は、第7表のとおり概ね農地47%、宅地26%、森林18%残りがその他となっている。

本地域は、東京の外延的拡大を受け、住宅団地開発がその初期から行われ、新市街地が形成されている。

また、ゴルフ場が野田市を中心に古くから開発され、7ヶ所約480haの広さに及んでいる。

第7表 民有地土地利用現況

(単位：ha)

区 分		野 田 市	柏 市	流 山 市	計
総 面 積		7,385.0	7,300.0	3,531.0	18,216.0
民有地総面積		5,571.9	5,335.3	2,609.2	13,516.4
構 成 比 (%)		75.4	73.1	73.9	74.2
田	面 積	1,128.8	1,034.7	565.0	2,728.5
	構 成 比 (%)	20.3	19.4	21.7	20.2
畑	面 積	1,656.0	1,386.2	650.9	3,693.1
	構 成 比 (%)	29.7	26.0	24.9	27.3
宅 地	面 積	1,116.4	1,613.9	786.3	3,516.6
	構 成 比 (%)	20.0	30.3	30.1	26.0
山 林	面 積	983.8	850.0	531.9	2,365.7
	構 成 比 (%)	17.7	15.9	20.4	17.5
原 野	面 積	54.4	77.1	26.5	158.0
	構 成 比 (%)	1.0	1.4	1.0	1.2
雑種地 他	面 積	632.5	373.4	48.6	1,054.5
	構 成 比 (%)	11.3	7.0	1.9	7.8

千葉県企画部統計課「千葉県統計年鑑」

注) 1. 総面積は、昭和52年10月1日現在の面積である。

2. 民有地総面積は、昭和53年1月1日現在の面積である。

1. 農 地

本図幅内の農地は、利根川及び江戸川流域及び両河川に挟まれた台地上に分布し、河川に沿った低地は水田、台地の両端は畑として利用されている。

本図幅内主要三市の農地は、耕地率（ $\frac{\text{耕地面積}}{\text{全面積}}$ ）で25%と県平均31%より低く、また、水田率（ $\frac{\text{水田面積}}{\text{耕地面積}}$ ）も49%と県平均59%より低くなっている。

農業基盤整備事業は、利根川及び江戸川沿いを中心に行なわれ、生産基盤が強化されてきた。

本地域は、宅地需要の強い地域であり、優良農地の保全を図ることが必要である。

第 8 表 農振法による農用地区域面積（市別）

（単位：ha）

区 分 市	農 業 振 興 地 域 内 面 積					農 用 地 区 域 面 積					農用地区域 指定率 (%)
	総 数	田	畑	樹園地	その他 採草 放牧地	総 数	田	畑	樹園地	その他 採草 放牧地	
野 田 市	2,499	1,120	1,345	25	9	848	557	277	5	9	33.9
柏 市	1,785	1,038	725	22	0	867	612	255	0	0	48.6
流 山 市	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	4,284	2,158	2,070	47	9	1,715	1,169	532	5	9	40.0

千葉県農林部農政課「市町村農業振興地域整備計画書」

昭和54年3月31日現在

2. 林 地

本図幅内の林地は、利根川と江戸川の両河川に挟まれた台地上の中央部に連なっているが、主要三市の林野率（ $\frac{\text{林野面積}}{\text{全面積}}$ ）は11%であり、県平均33%に比べるとかなり低くなっている。

本地域は、マツを中心とする人工林の針葉樹が多く、かつては備蓄林として農家経営等の副次部門を担ってきたが、近年は林業活動は停滞しており、地域住民の保健休養的森林空間としての都市林の機能がクローズ・アップされてきている。

第9表 市別森林面積一覧表

(単位：ha)

区分 市	総 計	国 有 林	民 有 林			
			計	県 有 林	市町村有林	私有林
野 田 市	856	—	856	0	1	855
柏 市	756	—	756	—	3	753
流 山 市	433	—	433	0	1	432
計	2,045	—	2,045	0	5	2,040

(注) 民有林には、地域森林計画対象外森林を含む。

第10表 森林資源現況一覧表

－1 県 有 林

(単位：ha)

区分 市	総 計	天 然 林	人 工 林	竹 林	そ の 他
野 田 市	0	0	—	0	—
柏 市	—	—	—	—	—
流 山 市	0	—	—	—	0
計	0	0	—	0	0

一 2 市町村有林

市 区分	総 計	天然林	人工林	竹 林	その他
野 田 市	1	0	1	—	—
柏 市	3	—	3	—	0
流 山 市	1	0	1	0	—
計	5	0	5	0	0

一 3 私 有 林

市 区分	総 計	天然林	人工林	竹 林	その他
野 田 市	855	110	632	56	57
柏 市	753	87	525	48	93
流 山 市	432	43	277	42	70
計	2,040	240	1,434	146	220

千葉県農林部林務課調べ

昭和53年4月1日現在

3. 都 市

市街地は、国鉄常磐線等鉄道各線に沿って形成されると共に国道 16 号に沿って内陸工業団地が点在している。

鉄道の各駅周辺は商業・業務地として利用され、それを囲むように住宅地が広がっている。

本地域は、東京へ 30 Km の圏内にあり、早くからその圧力を受け、市街化が進められてきたが、昭和 30 年代後半からは既成市街地の外縁部に東京指向のベッドタウンとして、急激に新市街地が形成されてきた。

都市計画区域は、野田市が 7,385 ha、柏市が 7,301 ha、流山市が 3,530 ha となっており、その用途地域の指定状況は第 11 表のとおりである。

第 11 表 市別都市計画区域一覧表 (単位：ha)

区 分		野 田 市	柏 市	流 山 市
市 街 化 区 域	第 1 種住居専用地域	554	1,966	696
	第 2 種住居専用地域	295	291	308
	住 居 地 域	438	1,144	357
	近 隣 商 業 地 域	41	60	35
	商 業 地 域	26	61	19
	準 工 業 地 域	104	137	7
	工 業 地 域	140	105	67
	工 業 専 用 地 域	169	162	—
	小 計	1,767	3,926	1,489
市 街 化 調 整 区 域		5,618	3,375	2,041
計		7,385	7,301	3,530

千葉県都市部計画課調べ

昭和 53 年 12 月 31 日現在

(千葉県企画部企画課 鶴 巻 成 男)

1980年3月 印刷発行

土地分類基本調査

野 田 (千葉県内)

編集発行 千葉県企画部企画課
千葉市市場町1番1号

印 刷 (株) 武 揚 堂
東京都中央区日本橋3-8-16